

縮減化社会におけるホスピス型地域づくりに関する研究

-山村過疎集落を対象として-

建築計画研究室 平岡 翔太

Abstract

過疎化が進む山村集落は「再生」して地域活性化するのか、「撤退」して集落移転するのか、「延命」して現状を維持していくのか、「消滅」の一途をたどるのか、今後の持続性を考える上で分岐点に立たされている。そのような縮減化社会の中で「量やスケールに依存できない状況での質的転換による生活環境の向上」を意図する地域づくりを「ホスピス型地域づくり」と定義する。花園の地域づくりは、縮減化の中で変化に乏しい社会制度に対して、脱制度的または自然発生的な取組みによって質的転換をしており、それは縮小化していく生活環境を多様化していく。またそれらの取組みによって生まれるコミュニティは複層的に絡み合うことで新たなアクティビティを創発している。このような地域づくりのホスピス性は過疎集落の本質的な問題点を打開する可能性を秘めている。

1. 研究背景

1960年代の高度経済成長をきっかけに、都市化が進み、山間部の集落はそれに伴い過疎化の影響を受けている。そして生活関連施設の機能の低下、少子高齢化に伴うコミュニティの衰退や移動難民の増加、地域固有文化の消滅、2次自然の消滅に伴う災害の増加など様々な問題点が浮かび上がっており、山村集落は縮減化を迫られている。行政の施策としては施設開発など地域活性化を意図する反面、市町村合併や都市的な制度導入など、結果的に地方の山村集落を切り捨てているのも事実である。そのような状況の中、山村集落は「再生」して元の活発な時期に戻すのか、「撤退」して集落移転するのか、「延命」して現状を維持していくのか、「消滅」の一途をたどるのか、今後の持続性を考える上で分岐点に立たされている(図1)。

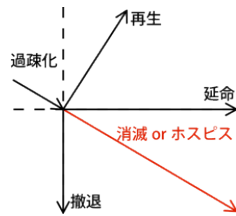


図1 集落の持続性

山村集落が縮減化していく中で、観光地化や施設整備などの「再生」による地域活性化は、一時的な対策であり、今後都市化が進む以上、地域の本質的な改善にはなっておらず、持続性を考慮する上で効果が得られにくい。また縮減化の中で、現状生活の質に依存することは数的、規模的に限界があり、生活環境の悪化を食い止める事は出来ない。つまり「消滅」の一途をたどることになる。しかし将来「消滅」の過程にあっても、縮減に合わせて生活環境を質的転換することで、その質は担保され、環境悪化を防止することが可能になるのではないだろうか。

2. 研究目的とホスピス型地域づくりの定義

地域が縮減化する過程で「量やスケールに依存できない状況での質的転換による生活環境の向上」を意図する地域づくりを「ホスピス型地域づくり」と定義する。本研究を通して、その実態を把握し、今後の地域づくりを行う上で、「ホスピス型地域づくり」の可能性探り、その有用性を評価することを目的とする。

3. 調査概要

本研究は、対象地の住民、行政関係者、地域施設関係者への現地ヒアリング調査によって進めた。なお現地ヒアリング調査は、対象地の組織や取組の実態、意図、きっかけ、評価をはじめ、その縮減化に伴う変化を聞き出すものである。

対象地は多面的な地域の変化(表1)や特性がある場所として、和歌山県伊都郡かつらぎ町花園(以下花園)を選定した。花園は「花園梁瀬」「花園北寺」「花園新子」「花園池之窪」「花園中南」「花園久木」の6つの集落から成り立っている。また花園梁瀬は中心地である「敷地」を含め「中南」「滝谷」「峯手」「古向」の5つの集落がある(表2)。その中で、本研究で主に調査を行った4つの集落の概要を表3に示す。

表1 花園の歴史の概略

昭和28年	和歌山県紀州大水害
昭和49年	花園村複合集会施設 ふるさとセンター完成
昭和56年	花園御田の舞 国指定重要無形文化財
平成4年	恐竜ランド完成
平成17年	かつらぎ町へ編入合併

表2 花園全体の概要 (H22年度)

人口	451人
全世帯数	214世帯
老人独居世帯	75世帯
老人夫婦世帯	41世帯
高齢化率	46.8%
出生数	2人
死亡数	7人

表3 各集落の概要

集落名	敷地	中越	滝谷	池之窪
図				
世帯数	104 世帯 (H23)	19 世帯 (H23)	9 世帯 (H23)	3 世帯 (H23)
標高	360m (花園支所)	430m (中越集会所)	430m (滝谷集会所)	700m (池之窪集会所)
敷地との標高差	0m	+70m	+70m	+340m

4. 過疎集落の変容と地域づくりの限界

生活、医療福祉、教育文化、産業仕事、公共観光などの地域を構成する要素は、集落の縮減化の中で多様な変化を遂げている。その中でも地域施設などのハード事業は変化に乏しく、制度などのソフト事業は変化を妨げており、それが生活環境の質を低下させている。

1) 恐竜館と観光ニーズ

恐竜館がオープンしたきっかけは、平成4年に恐竜ランドがオープンし、多くの客を收容したため、地域活性化を図り、それに便乗して建設された。しかしオープンして16年経過した今、客は半減しており、経営は赤字である。住民の評価は、「何回も行きたい所ではない」、「大人の楽しめる場所ではない」というものであり、観光ニーズにそぐわない施設となっている。施設は花園支所が運営をしており、役場の意見として施設の存続は今後の検討課題とされている。しかし、施設を残す意図として雇用の場というのが大きく、それが原因で閉鎖を引き延ばしているのも事実である〈1〉〈2〉。現在2人が雇用されているが、2人とも施設が無くなると、働く場所もなくなる。つまり恐竜館の経営は、ほとんど客が来ない中、維持管理費や人件費を消耗するだけで、現在、地域のお荷物となっており、一過的な事業であったということがわかる。

2) 北寺公営住宅と市町村合併

花園には、4つの公営住宅団地が備えてあるが、その中の北寺団地は居住率が低い(表4)。その要因は平成17年の合併の影響による家賃の高騰や、通勤通学場所の変化が大きい〈3〉。家賃の高騰により、敷地に家を新築したり、引越したり、または市街地の方へおりに住む居住者が多かった。特に役場の職員はかつらぎ町役場へ通勤場所が変わったり、小学生は中学校が休校したりしたので、それに合わせて移住する人が多かった。合併という制度によって、そこでの居住条件や居住環境が悪化し、現在では寂れた住宅団地となっている。

表4 花園の公営住宅

団地名	戸数	世帯数
花園団地	13戸	11世帯
清滝団地	9戸	9世帯
北寺団地	12戸	2世帯
白谷団地	4戸	4世帯

表5 介護保険制度と社会福祉協議会

■介護保険制度導入の影響
 (6)平成12年から介護保険制度になったんで、デイサービスでもヘルパーでも居宅支援でも、全部ほんまは自分とらで採算とらなだめなんですね。今までやったら補助金もろうて、その中で委託金もろうて委託の中で、事業を行ったのが、(介護保険制度導入後)ひとりにサービスしたら、保険、お金もろうていう中から、事業の維持費も、また従業員の給料関係も全部儲かって、言わんば、いけるんであって。うちのところの場合にはやはり、その地域的な問題もあって、言わんば、辛いんですけど、採算ちょっと取れないんですけど、採算取れないっていうのは、今までは、委託金っていうのかな、そういうカタチで介護保険までできてたんですけど、今中から理解してもらいながらきてたんですけど、介護保険になつたら、やっぱり民間なんよ。自分でやっていかんかっていうカタチになる。でもうちとらしたら、どんどん営業をかけた、仕事とりにいって、ということも、出来やんのですよ。(社協代表者)
 (7)介護保険制度の中では決められた事しか出来ないんで、例えばヘルパーさんとかだったら、利用者さんがごこも庭の大掃除とか草引きしてよとか言うても、それはヘルパーさんの仕事じゃないんで。(ホームヘルプ職員)
■社会福祉協議会花園支所の設置の意味
 (8)介護保険でお金はとつとるけども、それを利用したい事業所がけへんっていうカタチになつたら、町も問題あるんで、保険料もろうて、何やしとんやけども、実は使おうと思つたら、来てくれる事業所ないって言うから、町も難儀やし、また利用者も出来やんって言うことで、ここ(社協)をどないか維持せなあかんやないってことで、まあ今まではとつとるってきてるんですけど、他所の事業所がくるんやたら、別にそこまで社協にお金出してるんで、やばいって言うのが、まあ普通考えますわね。ほやけどもそれが無い地域なんで、やっぱり花園の人が利用できへんやたら、難儀なんや、どないか維持、補助を出してても維持するって言うことで、ちょっとプラスアルファ頂いてるんですよ。(社協代表)

3) 花園保健センターと介護保険制度

花園保健センターは花園支所の保健師主導のもとと設置が決まった。施設の設置は、保健関連の取り組みを行う時に集まれる場所をつくるという意図のもとで、検診を受けられる場所、食生活を学ぶ場所として建設された。施設は検診、機能訓練事業、料理教室などのイベントを開催するのに利用されていた。そして内部には介護用の浴室がついており、機能訓練事業ではそれを利用して訓練を行っていたのだが、平成12年度の介護保険制度導入後、保健師として事業を行えなくなつた〈4〉。そのため現在浴室は利用されないものとなっている。このように制度の変化によってハード事業は、それに対応出来ないという部分が生じている。

4) 社会福祉協議会と介護保険制度

社会福祉協議会は花園唯一の介護支援事業所であり、介護保険事業をはじめ、高齢者生活福祉センター事業など、花園の高齢者の介護福祉に密接に関わっている。平成12年度から介護保険制度が導入され、役場からの補助金や委託金によって成り立っていた事業は、社協自身で採算を取らなければならなくなった。しかし、人口の少ない地域であり、他の地域とも距離があるということから、営業をかけることが出来ないため、採算が取れないというのが現状である〈6〉。そのため町からの補助によって事業を維持している。花園の立地条件から利用者が事業所を選択することが出来ず、また新たな事業所が参入することが見込めない。そして

事業所は制度によって決められた作業しか行えないため、住民との関係性は希薄化する〈7〉。このように制度の変化によって、過疎地の介護事業は成立していないということがわかる。現在、社会福祉協議会が花園に設置してあるのは、介護保険料を支払っている住民にサービス受けさせるための行政の口実であり、事業所側も住民側も厳しい状況にあることがわかる〈8〉。

5) 梁瀬小学校と予算制度

梁瀬小学校の設備や備品関係は、周辺の僻地小学校と比較しても充実しており、更なる向上は望んでいない事から、現在の小学校の予算は余っている。それは配当される予算を児童数に割ると、他校より高いため、設備備品に多くの資金を投入することが出来るからである。そのため予算を図書など学習のために活用することも出来るが、使い道が無くなっているのが現状である。資金を投入しても、学校に来る児童が少なく図書館などパソコンが余っており、設備の充実化による児童数増加は望めないということがわかる〈5〉。

6) 地域施設・制度の評価

表6のような地域活性化を目的としたハードの事業は縮減化に伴う変化に乏しく、地域づくりにおいて一過的であり効果が得られにくいということわかる。また介護保険制度のように、都市化に伴う制度の導入は、縮減化社会においては不適合であり、質の転換を妨げる要素になりうるということが考えられる。

5. 過疎集落の縮減化と質の転換

集落の縮減化の中、変化に乏しい地域施設や制度に対して、脱制度的な取り組みや自然発生的な取り組みによって、生活環境は質の転換を遂げている。

事例Ⅰ 児童Dmと駐在さんの新たな関係性〈9〉～〈25〉

小学校の児童数減少により、多様性に満ちた児童の放課後の遊びは、画一的なものに変化している。そのような遊びの縮減化の中で、梁瀬小学校の児童は花園駐在所に在駐する巡査（以下駐在さん）と交友関係を持つことで新たな遊び環境の創出を行なっている。小

学生同士の遊びの枠を超え、交友関係が地域に広がることで、多様性に満ちたアクティビティを創出している〈16〉～〈23〉。それは以前の駐在さんが築き上げた地域との親密性〈9〉、現在の駐在さんが地域の子供を受け入れるという順応性〈12〉〈13〉によって実現している。また巡査の業務の自由度が高さ〈14〉〈15〉も関係づくりの大きな要因となっており、業務を超えた、脱制度的な子供との関係性を生み出している。交友関係が深まるに連れ、本来の遊びという目的から、学校行事の参加などに見られる愛情に溢れた関係性、学校との多様な関係性へと発展している〈24〉〈25〉。

事例Ⅱ 健康教室から生まれる自律性〈26〉～〈38〉

縮減化に伴う生活環境の質の低下に対して、花園支所の保健師は、業務を超えた脱制度的な住民との付き合いを通してその質を担保している。一極集中型の効率化が追求される現代の医療に対して、複合的で愛他性に満ちた住民との関係性を築いている〈57〉～〈62〉。

表7 保健師の脱制度的な付合

<p>■訪問計画 (57) 朝から連絡があって、そこに行かないと行けないケースだとか、というのもあるし、今日はどこどこへ出かけて、介護保険の調査に行かないと行けないだとか、そういうのがあってその訪問へ行くときに計画の中で、今日はどこどこへ行くというのを立ててそれで回っています。保健師の活動はこの地域の住民全部です。でも一人でそんなには無理だから、計画は立てて、優先順位を決めて、回っています。(保健師)</p>
<p>■金銭管理の手伝い (58) 小さな郵便局があったのに統合してしまっただけ、人員を減らされていて、だから安否確認したりとか、ちょっと来てよと言われて行ける人がいなくなりました。配達距離がすごく長くなってしまっただけで、それで精一杯になってしまっただけだ。(だから) ちゃんとお金下ろしたいだとか、ちゃんとお金入れてくれないか、という仕事ができなくなりました。保健師の仕事ではないし、お金を預かるのは良くないけども、郵便局に行けないとか、銀行に持っていけないとか、なってくるので、訪問に行ったときに、一緒に頼まれる事が多い。本当はお金をさわるのは良くないんだけど、ヘルパーさんなんか絶対断って、触ったらいけないということになっているんだけど、そんなこと言っていたら、みんな困りますもん。(保健師)</p>
<p>■電話での救急対応 (59) 救急とかなんかあったときは、呼ばれるんです。それで現場行って、本人がどんな状態っていうの確認して、支所へ報告して、それで病院探してもらって。夜間とかは、救急対応の人も合併してから雇ってらっしゃって、それまでは夜間も役場の職員は対応していました。夜間職員は病院探して連れて行くというものでした。車が無いからとか、タクシーも無いですからね。(保健師)</p>
<p>■入院先からの電話 (60) もう家帰っても電話もくれないし、休みでも電話もくれないし、だからそれはもう仕事どうこうじゃないから、人間同士の付き合いかなと思うし、それにちょっと医療を知ってるから、電話してくれるんやなって思うこともあるし、人間関係の上手いかない部分で電話してくれることもあるし、精神疾患の人も病院からちょこちょこ電話くれるし、朝夕問わず連絡くれるし、電話くれた時にやっぱり調子が悪いとか言うのわかる。ちょっと調子戻ってきたなとかわかる。でもそれはもう本当に拒みもせえへんし、なんかあるんやなって受け止めるんやけども、そういう関係は大事にしたいかなと思う。(保健師)</p>
<p>■休日の病院訪問 (61) まあ気がなったら訪問するもん。休みの時でも、やっぱり調子の悪い人がずっとお家で土日とか祭日とかはさんでも、どないするかなと思ったり、見に行くもん家からでも。病院のせきに行ったりとか、そんな仕事関係ないんやけども思う。でもお父さんになるから行く。今日はこんな仕事で行っても、来たついでによろから、気がなつたら言えへんけども、上司には。だからそれは自己満足なのかわかんないから、でもお父さんになって、ほんと出来たらうれいし、まだ他に問題ももあるかもしれんから、行った時にまたいっぱい問題もろうて痛てるんや。(保健師)</p>
<p>■趣味の付き合い (62) 誘ってくれた時はな、一緒に参加して、良かったよって思うかな。自分も一住民としてっていうんか、人として。今日はコンニャクつくろうかという一緒につくったりとかは、ケーキつくろうかという一緒にしたりとかっていうのも、別に休みの時とかでも、どっか遊びに行くとかでも、一緒に行ったりとかってゆうようなこと、仲もえんか。(保健師)</p>

表6 ハード事業の概要と施設の評価

施設名	恐竜館	北寺公営住宅	花園保健センター	梁瀬小学校
施設				
完成年	平成7年	平成8年	平成9年	昭和37年
場所	有中	北寺	敷地(梁瀬)	敷地(梁瀬)
評価	<p>〈1〉まあ雇用の場にもなってるんで。あそこ閉めたら今まであった人の雇用が無くなった。これからはほんまにどうなるかわかんないんですけど、今のところはまあ赤字でも続ける感じやね。(役場職員)</p> <p>〈2〉役場の続けるかっていう判断で私に聞かれても、もう閉めるからやめてくださいって言われればそれまでだし。まあ開けてくれるから、仕事もないし来させてもろうとるけど、ここ経営して赤字でそんなの無理な話で。(館長)</p>	<p>〈3〉(公営住宅について)昔はだから寺もいっぱいあったと思うけど。坂田さんは(敷地に)家建てはったし。だから坂田さんのところで公務員公務員で、役場職員、役場職員や、旦那さん奥さんや。そうなってきたら、かなり家も奥高いや。その北寺の住宅へ住んできたけど、子供が中学校へ上がるのう合わせ、もう下へ降りたとかね、そういもいてはるし。あそこは今ほんまに人居ないんちゃうかな。(20代住民)</p>	<p>〈4〉(保険福祉センターをつくった意図は)検診と機能訓練とか健康教室とかそういう場所が無かったんで、みんなが来られると。 (現在の評価は)介護保険制度が始まるまではずっとそれが利用できなくて、ああいいなと思っただけでも、介護保険制度はじまってあれはあかんようになってきたから、機能訓練事業ができなくなったから利用することが今分かってきた。でもあって良かったよ。今使えないけど、お風呂とかも使えないけど。(保健師)</p>	<p>〈5〉(学校設備は)ここが(周辺の学校と比べても)ビカイチだと思います。色んな備品関係とかそんなのも、予算関係もやっぱり小ざな学校ですけども、町の方から手厚く予算頂いています。(大きな学校は)例えば一般所望とか、教材所望、何十万とかもらってるかわかんないんですけど、子供の人数割にすれば、うちは毎年30万ぐらいの教材備品っていうのは、もうろうとったんやけども、もう十分分ありますから今回は結構ですと。それが言えるぐらいの備品というかな。揃ってるちゆうことなんやけど。(校長先生)</p>

保健師の取り組みの1つとして、高齢者に対する健康教室を行なっている。それは高齢者の健康チェックを意図しており、折り紙などの作品づくりを通して集まる場所を設けている〈26〉～〈33〉。またそれと同時に縮減化が進む中で集落を引っ張っていけるリーダーを育成し、そのリーダーによる自主的なコミュニティの形成を目指している。その事例として、滝谷では保健師主導で行われた健康教室が、自主的なアクティビティへと変容を遂げている〈34〉～〈38〉。折り紙を折るという行為に対して、そこから派生する交流関係〈33〉や健康意欲から、達成感や満足感〈31〉、期待感〈32〉を生み出し、それらが自主性へと質的転換している。またそれにリーダーMeの存在〈36〉が加わり、集落の団結力をかきたてている。自主的健康教室の臨時性〈37〉やイベント性は、画一化していく生活環境を多様化する〈38〉。それはコミュニティの縮減化の中での対策で行われた他律的コミュニティの形成から、自律的コミュニティへの変容であり、保健師はそのコーディネーターに務めている(図3)。

事例Ⅲ 孤立集落の自然発生的コミュニティ〈39〉～〈47〉

池之窪は世帯数3世帯、住民票のある住民が4人とそれに加え二地域居住が1人いる。3世帯の家族構成は、夫婦世帯が1世帯と独居の女性が2世帯である。住民は全員80歳を超えており、移動困難地域であるため、まさに「陸地の孤島」といえる。旦那さんが亡くなるなどの家族の縮小〈40〉や、住民の減少によって、多様性に満ちた人付き合いの中での生活から、生活要素が削られ画一化が迫られている。特に寝雪が積もると農業をすることが出来ないため、家に閉じこもる生活になる〈39〉。このように数的、生活要素的な縮減の中で、池之窪に在住する3世帯は、冬期に寄合を開くことによって、生活の多様性の再生が行われている。それは独居の画一的な生活環境を打開し〈42〉、寄合の臨時性や柔軟性〈45〉からもみられるように、近所付き合いを超えた家族的な付き合いへと発展している。またそれらの付き合いの中から生まれるリーダーは、その自律性〈46〉〈47〉から、物事を起こすきっかけとなり、集団もまた自律的なものとなる。その地域性から、集団意識が強く、自分たちで悪条件を打開するという団結力を生み出している。(図3)

事例Ⅳ 移動手段の形式化〈48〉～〈56〉

池之窪は標高が高く立地条件が悪いため、交通アクセスは自動車移動が必須である〈48〉〈49〉。しかし自動車の運転が出来ない住民は近所の移送サポートが必要であるにも関わらず、運転出来る住民の減少により、現在は社会福祉協議会移送サービスの要件に当てはまらない人付き合いやお見舞い、葬儀などの「事足りない事」〈52〉は移動が困難な状態になっている。そこで

新たな移動手段として「白タク」が生み出された〈50〉〈51〉。池之窪は移動機能の縮減化の中で、移動補助という柔軟性のある近所付き合いを一般化、形式化〈53〉することで、その利便性や移動の自由度を確保している。元々近所付き合いで「お互い様の精神」や「助け合いの精神」〈54〉で行われていたものから、あえて利害関係〈56〉を生み出すことで人付き合いに秩序を持たせている。元々の田舎の親密性溢れる人付き合いから、一步距離を置くことで新たな関係性を生み出している。そうする

【白タク】営業許可を受けず、自動車を使ってタクシーを営業する車の事。

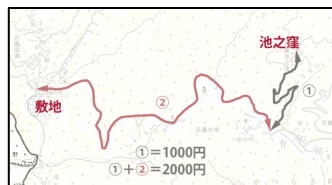


図2 白タクの料金とルート

ことでお互い親密な関係を持続しながらも、移動機能のみを重視した人付き合いを形成することが可能となっている(図3)。

6. 質的転換とコミュニティの特性

事例Ⅰは児童Dmとの自然発生的な出会いから、駐在さんの脱制度的な取り組みによって、コミュニティが形成されている。事例Ⅱは保健師の脱制度的な取り組みから、健康教室を介して自律的なコミュニティを形成している。事例Ⅲ、事例Ⅳはその地域性から自然発生的にコミュニティが形成されている(表8)。

1) 池之窪の自律性と滝谷の柔軟性

事例Ⅱと事例Ⅲはリーダーを中心に自律的コミュニティを形成している部分では共通しているが、その発生要因が異なっている。そのため事例Ⅲは、事例Ⅱと比較して集団意識が強く、自律性が高い。池之窪も滝谷と同じように、保健師による健康教室を開催したのだが、それを受け入れていない〈63〉。それは池之窪の「陸地の孤島」という悪条件を打開するという集落の共通意識から生まれる自然発生的な自律性から、あえて寄合をコーディネートされる必要は無いという現れであり、事例Ⅱの滝谷とは性質が異なっている。一方、滝谷は他を受け入れる柔軟性に優れており、それがコミュニティの質的再生に寄与しているといえる(図3)。

表9 保健師の健康教室に対する意見

<p>■池之窪の縁起性</p> <p>〈63〉こないだ初めて保健師さんが来てくれて、鶴の折り紙を教えてもろうて、ちょっと折ったけども。私も3人やし。そんなことわしら不器用で嫌いやし、こっちはしてないけど。(池之窪住民80代)</p>
--

表10 Lfの体験学習参加による派生コミュニティ

<p>■ワラソウ教室</p> <p>〈64〉あの道で出会うもな、ケンボウ(Dm)くんちゅうて私も言えるし、ほいたら笑顔でしてくれるしな、嬉しいわ。前におった駐在さんがね、まあ細目に村を回ってくれん人、ここへもおおいつちゅうて声かけて、トコトコと入ってきて、よう見まわってくれたんよ。そのお巡りさんが今年6年生でおる子ら(ケンボウ)と、ほんまに親子よりかもつと仲のエエ友達になつとつよ。毎日ちゅうほどとちやうけど、ちよこちよこ来てくれるんよ。見回りに来てくれて、年寄りじゃさげね。そらほんまによう来てくれた。雪ら降つたら必ずね、雪かき来てくれた。駐在さんが。ええ人やつと。たまたまね、落ち葉拾ひしたるわってね。その子Dm連れてね。ほいで家の車へ乗ってね。コンテナ持って行ってね。落ち葉拾うて来てくれたことあるよ。ほいたらそのケン坊くんも一緒に、行ってきてねっていうとあの駐在さんに色々してもうた。(体験学習講師 Lf 80代)</p>
<p>■善道教室</p> <p>〈65〉ほいたら校長先生やね、習字もね教えに來たってちゅうてね、ほいで行ったことあるんよ。ほいたら、5人ぐらいの子供らね、教えてちゅうてね、ここLf家まで来てね。ここね、一緒にしたこともある。ここへ来てね、一生懸命なつておてね、一服しようかちゅうたらね、よっしゃちゅうてね、ほいで夕アつとこの下のお寺(遍照寺)へね、もう5分もかからんのに行くんやして、坂道おりて、ほいであそこいって鐘ついたりねして遊んでね。ほんでまた時期に上がってきてね、あの子らと遊んだの楽しかった。(体験学習講師 Lf 80代)</p>

2) 体験学習が生み出すコミュニティの複層性

梁瀬小学校は、学校の縮減化の中で、地域住民を体験学習の講師として招くことで教育環境の質を保っている。Lf（中越）は講師として参加したが、技術伝承や地域交流という本来の目的に加え、児童 Dm（敷地）と講師 Lf（中越）との間に派生コミュニティが生み出されている〈64〉〈65〉。ワラゾウ教室から派生するコミュニティは、事例Ⅰと関連しており、Dm（敷地）と駐在さんが友達関係にあり、また Lf（中越）と Dm（敷地）は体験学習の知合いであるため、Lf（中越）の家の落ち葉広げに、Dm（敷地）と駐在さんが来るという複層的なアクティビティが生まれた。それは普段の駐在さんと住民 Lf（中越）という関係から、子供が加わることで、愛他性あふれる付き合いへと発展していく〈64〉。質的転換の中で様々な部分で発生するコミュニティが複層的に絡み合うことで新たなアクティビティを創発している。（図3）

7. 結論

縮減化社会の中で地域活性化を目的としたハード事業は、縮減化に伴う変化に対応しきれない部分があり、効果が得られにくい。またソフト事業での制度化は、縮減化に伴う変化への対応に乏しく、事業の質を担保することは困難である。そもそも制度は都会的な施策

であるため、都市化が進み縮減化を迫られる集落に対しては、差異が生じるのは当然である。つまり縮減化社会では、一般性を追求した効率的な対応ではなく、個々の要素に対する質の担保や質の向上などホスピスな取り組みが求められている。

変化に乏しい社会制度に対して、脱制度的な取り組みはホスピスに対する効果を発揮している。また自然発生的な質の転換は、縮減化が迫られる中での、住民の生活の工夫であり、制度を脱する1つの手段でもある。ホスピスな取り組みとしては、事例Ⅰ～事例Ⅲのように柔軟化は効果が得られやすいが事例Ⅳのようにあえて形式化するというような住民の工夫も見られた。つまり自然発生の住民の知恵は無限大に広がり、地域の変化に順応する可能性を秘めている。

地域に存在する小さなコミュニティが複層的に交わることによって、多様性に満ちたアクティビティを創発する。それはコミュニティの縮減化の中で、その質を転換し、新たな質を生み出していく。縮減化社会の中で生成される地域性溢れるコミュニティの複層性が連鎖することで、地域は変容を遂げながらも、質は担保され生活環境は向上する。それは縮減化を迫られている山村集落では効果を発揮し、ホスピス型地域づくりの可能性を秘めている。

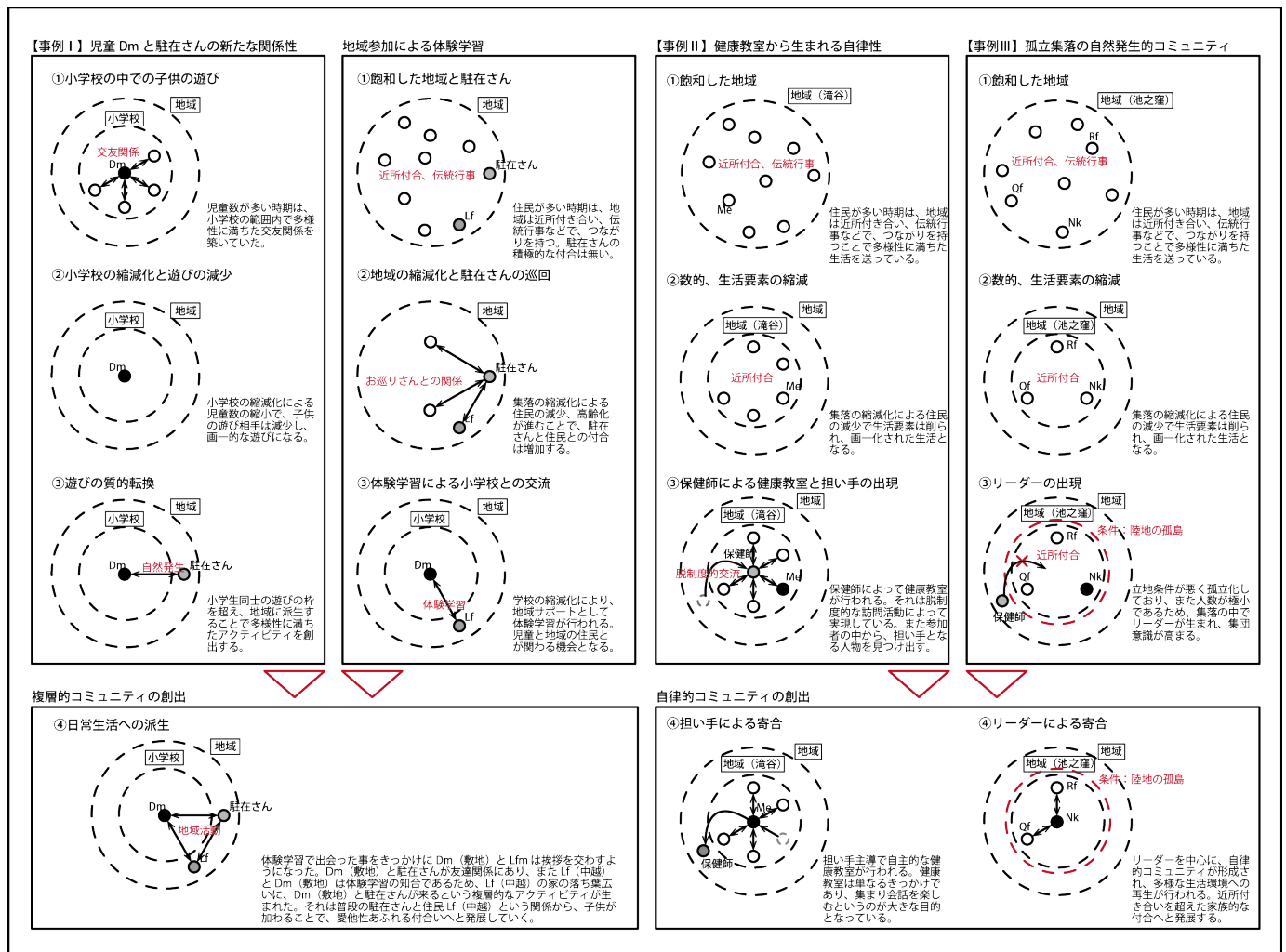


図3 質的転換とコミュニティの形成

質疑応答 M10TD038 平岡翔太

嘉名先生：研究として致命的な点がある。本編を拝見していると研究の位置付けが書かれてない。ちゃんと色んな人から話し聞いて、それをまとめているという部分には敬意を表するし、これちゃんと読むと一個一個ちゃんと記述されている。それは評価している。やっぱり論文として出すからには、周辺の関連の研究であるとか、中山間地域の縮退している空間を支えようとしているかということは農村計画であるとか、都市計画であるとか、建築関係でもあると思います。たくさんの興味関心持っている研究者がたくさんいらっしゃるって、色んな集落で研究はしていると思うし、私が知っているだけでも、それを何とかシステム化しようというような、そういった取組しているところたくさんあると思います。それをやっぱりちゃんとレビューしないで、これを書くっていうのはやっぱりまずいのではないかという気がする。だからそれは最低限やっていただきたいなというふうに思います。

内田先生：理想とするホスピス型の社会というのはこんなもんだと、色々具体的な内容を踏まえて示して頂いたって言う風に理解したら分らないでもないですけど、地域づくりに関する研究、ホスピス型の地域づくりって、具体的にどのようなことですか？

発表者：ホスピス型の地域づくりとは、結論にも述べているように、地域の自然発生的に出てくるような質的の転換があります。それと地域の中にコーディネーターとしての役割を担っている人が入って・・・

内田先生：その時にね、ほっておいたら、あちこちこのようなものは出来ているじゃないですか。ほって置いたら良いよって言うことですか？

発表者：それは条件によって、発生要因というのがありますが、その分類までは今回の研究では出来ていないんですけど、そのような調査は今後の課題となっていくと考えています。

内田先生：地域づくりに関する研究にはまだ至っていない。

発表者：そうですね。今回はある集落の事例を把握することによって、ホスピスの可能性を見ていくということを行ったという研究なのですが。

内田先生：もう一つね。例え少数であってもと書いていますけど、相対的にはコーディネーターの比率高いんですね。結局は駐在さんにしても、保健師さんにしても、既存の制度に乗っかって来ている人が、相対的には実は1人だけでも、相対的には余裕があるから、色んな事ができますよ。柔軟に対応することが出来ますよね。それが理想ですよ。じゃあ既存の制度で余裕を持って、人を配置するというので、いいんじゃないのっていう部分がある。

発表者：集落が小さいからこそ、1人の力がすごく大きいというのを伝えたかったというのが、1つで。

内田先生：それだったらホスピス型地域づくりって新たに言うような話ですかね？

発表者：新たに地域づくりの提案を言うよりは、元々ある集落の中で行われているホスピスな要素を抽出して、今回事例にまとめたというものなのですけど。

内田先生：ホスピス型の社会というのが、ありうるということなのですか？

発表者：それに近いのだと思います。

内田先生：ホスピスは、元々はターミナルケアの一つですよ。だから最終的にはこのコミュニティというのは死ぬことを前提で付き合うということでもよろしいのですか？保健婦さんや駐在さんは、このコミュニティが無くなるまで、将来いない訳じゃないですか。

発表者：それに関しては、保健師の例で言うと、健康教室という会が開かれた後に、担い手によってそれが引き継がれるというプロセスがあるじゃないですか。そのよって持続していく。

内田先生：それで持続していくという話になるんですけど、ターミナルであるとかホスピスとは違うと思います。

発表者：その縮減していく中でも、持続していくというのは今回述べたかったことで、ただ縮減していく中で、それが消滅していけば、生活環境が悪くなる中で、消滅していくだけであって。

内田先生：色々魅力的な言葉を使っていますけど、まだ何か逆に言葉に弄ばれているような気がします。

藤本先生：今のホスピスの現況のサンプルが出てきている話を聞いていて、過疎の田舎の現状で、集落構成している中ってというのが、ああ同じような事やっているなというような感じで、今この地域だけで、出てきているホスピスのタイプでも無いような気がするけど、それはどうですか？ここのかつらぎ町の花園地区だけの話なのかな？

発表者：地域性というのも1つあると思うんですけど、まだ今回は事例というのがたくさん無いので、まだそこまで実証できていないというのが。